Title	エマニュエル・レヴィナス：いくつかの自由概念
Sub Title	Emmanuel Levinas : plusieurs notions de liberté
Author	時田, 圭輔(Tokita, Keisuke)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2021
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.26, (2021.) ,p.34- 44
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20211201-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エマニュエル・レヴィナス：いくつかの自由概念

時田圭輔

現在、レヴィナスは20世紀を代表する哲学者の一人だと考えられている。1935年に「逃走について」という論文を発表し、1947年に『実存から実存者へ』、そして「時間と他なるもの」を刊行する。その後、1961年に『全体性と無限』という代表作を出版している。

レヴィナスの哲学は顔、倫理、他性といった概念で広く知られ、これらに関する論文はすでに数多く存在する。とはいえ、こうした概念の陰で、レヴィナスは自由 [liberté] という概念に着目している。『全体性と無限』の第三部のなかで自由という語を使い¹、それをすぐさま意志と言い換えている²。それゆえ、より厳密に言うならば、レヴィナスは意志としての自由注目している——この意味での自由は1953年に発表された「自由と命令」という論文のなかで主題として論じられているように思われる³。

¹ 「自由の至高の試練 —— それは死ではなく苦しみである」(Emmanuel Levinas, *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1961, p. 216)。

² 脚注1の文章の後でレヴィナスは以下の一文を書いている。「意志の至高の試練は死ではなく苦しみである」(*Ibid.*, p. 216)。この二つの文を比べてみるとレヴィナスが自由を意志と言い換えていることは確かである。

³ 例えば以下を参照。Cf. Pierre Hayat, « La liberté investie. Levinas et Sartre », dans *L'enseignement philosophique*, 61^e année, n°4, avril 2011, p. 52.

さて、レヴィナス哲学における自由を扱っている先行研究としては、例えばピエール・アヤの『付与された自由。レヴィナス』がある⁴。ピエール・アヤはレヴィナスの自由を主題として論じ、意志としての自由を取り上げている。それだけではなく、レヴィナス哲学にはこの自由とは異なるいくつかの自由概念があることを示している。しかしながら、以下の二点は扱われてはいないように思われる。一つ目は、レヴィナスが認識する運動⁵を自由だと考えているように思われること。二つ目は、レヴィナスが外部からの、そして存在からの自我の自由を主張しているように推測されること。本稿はこの二つの仮説を証明することを目指す。一つ目の仮説に関して、『全体性と無限』と「時間と他なるもの」での自由についての記述に着目したい。二つ目の仮説に関して、『実存から実存者へ』と「時間と他なるもの」でのそれに注目したい。以下、順を追って証明していく。

I. 認識の自由

I. 1. 『全体性と無限』における認識の自由

『全体性と無限』の第一部の「形而上学は存在論に先行する」という節のなかでレヴィナスは自由を定義している。それは存在論が問題になる時である。「それゆえ、存在との関係はこのような他なるものとの関係ではなく、他なるもの [Autre] を同 [Même] に還元すること [réduction] である。これが自由 [liberté] の定義である [...]」⁶。自由と訳出した *liberté* という語

⁴ Pierre Hayat, *La liberté investie. Levinas*, Paris, Kimé, 2014.

⁵ 後に見るように、レヴィナスは『全体性と無限』で *connaissance* という語を使っている。この語は「何かを認識する」を意味する *connaître* という動詞が名詞にされたものである。本稿ではこの動詞の動的側面を訳語に反映させるために、*connaissance* を「認識」ではなく、「認識する運動」ないし「認識すること」と訳出する。

⁶ Emmanuel Levinas, *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, op. cit., p. 16.

は一般的には自由な状態を意味する。それゆえ、他なるものを共に、つまり自我の同一性に還元するという運動をレヴィナスは自由として、換言すれば自由な状態として定義している。

では、この還元する運動とは何か。レヴィナスは存在論を問題にし、他なるものを自我の同一性に還元することがその特徴だと述べる。「西洋哲学はたいていの場合存在論であった。つまり、他なるものを共に還元することである [...]」⁷。このように他なるものが自我の同一性に還元されることが問題となる時、レヴィナスは認識することに言及する。「認識すること [connaissance] はこの [自我の] 同一性の拡大である」⁸。この引用文が現れている文脈を考慮に入れると、以下のように解釈することができるだろう。つまり、認識する運動は他なるものを自我の同一性に還元する運動であり、この還元によって自我の同一性が拡大する、このようにおそらく解釈することができる。この解釈が正しいとすれば、レヴィナスは他なるものを自我の同一性に還元する運動を認識する運動として見なしている。確かめよう。先のレヴィナスの文章はこう続く。「認識することは自由である」。認識する運動は自由である、つまり自由な状態にある。すでに見たように、レヴィナスは他なるものを自我の同一性に還元する運動を自由として定義していた。この自由の定義を念頭に置いて引用文をもう一度読んでみると、レヴィナスは認識する運動をこの運動として考えていると言える。

レヴィナスは他なるものを自我の同一性に還元する運動を自由として定義していた。そして、認識する運動はこの還元する運動であった。それゆえ、レヴィナスは他なるものを自我の同一性に還元する認識の運動を自由として、つまり自由な状態にあるものとして考えていると言える。

では、この自由概念は『全体性と無限』よりも前に発表されたテキストのなかでも現れているのか。実際、この概念は「時間と他なるもの」で断

⁷ *Ibid.*, p. 13.

⁸ *Ibid.*, p. 14.

片的な形ですでに考察されているように思われる。このことを確かめる前に、『実存から実存者へ』での認識概念を確認しよう。

I. 2. 「時間と他なるもの」における自由

I. 2. a. 『実存から実存者へ』での認識

『実存から実存者へ』の「光」という節のなかで、レヴィナスはプラトンの光の概念 —— 光によって対象は認識可能なものになる —— に着目している。そして光が現象の条件であると述べ、理解するということに注意を向けている。「外部に由来するもの —— 光に照らされている —— は理解されている [compris]、つまり私たちに由来する [vient de nous]。光によって対象は世界である、つまり私たちのものである [sont à nous]⁹」。このわかりにくい文章を整理するとその内容はおおよそ以下の通りだろう。第一に、理解する運動とは光に照らされた外部を理解することである。第二に、それを理解することは、その起源が自我に転じることである。第三に、このような過程を経て、光に照らされた外部は自我のものになる。とすると、このレヴィナスの記述から、理解する運動は外部を自我のものに変化させる運動であると言えるだろう。実際にそうだとし、理解する運動 *compréhension* は認識する運動 *connaissance* とフランス語の次元で類義語である。このことを考慮に入れると、認識する運動は光に照らされた外部を自我のものに変化させる運動であるとほぼ確実に言えるだろう。

『実存から実存者へ』でのこの認識概念は『全体性と無限』でのそれと近いように思われる。後者の書物において、認識する運動は他なるものを自我の同一性に還元することとされていた。「存在は外部性である」という章のなかでレヴィナスは他性という語を外部性のそのの代わりに使っている。それは外部性と自我との関係が問題となる時である。「外部性 [extériorité] は —— お好みであれば他性 [altérité] は —— 同に転じてし

⁹ Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant*, Paris, Revue Fontaine, 1947, p. 75.

まうだろう [...]」¹⁰。この引用文のなかで、レヴィナスは外部性を他性と言
い換えている。それゆえ、他なるもの [autre] と外部にあるもの [extérieur]
は同義語としてほぼ間違いなく考えられているだろう。そうだとするなら、
認識概念を以下のように言い換えることができる。つまり認識する運動は
他なるものを、換言すれば外部にあるものを自我の同一性に還元すること
である。一方で、『実存から実存者へ』のなかでの認識する運動は光に照ら
された外部を自我のものに変化させる運動だと考えられた。とすると、外
部が自我に帰すという点でこの二つの認識概念は近いと言えるだろう ——
そうだとすると、レヴィナスのテキストの刊行年順から見て、『全体性と無
限』での認識概念の萌芽が『実存から実存者へ』でのそのうちにすでに
現れているとおそらく言える ——。次に「時間と他なるもの」に現れる自
由に注目しよう。

I. 2. b. 「時間と他なるもの」での自由

「時間と他なるもの」の「エロス」という節のなかでレヴィナスは自由
という語を使っている。「私たちの権力に逆らっているということは私たち
のそれと比べてより大きな力ではない。[...] 極めて重要な指摘をしよう。
私はまず初めに他人を自由として措定しているのではない [...]」¹¹。ここで
の自由とは何か。この引用文は他人の他性が問題となっている文脈のなか
にある。それゆえ、自我の「権力に逆らっているということ」という表現
はこの他性を指していると思われる。そうだとすると、権力と他性の対立
が問題となっている文脈のなかでレヴィナスは自由という語を使っている
と言える。それゆえ、レヴィナスは権力を自由、つまり自由な状態として
考えていると少なくとも言えるだろう。ここで、「時間と他なるもの」の一
年後の 1948 年に執筆された「発話と沈黙」というテキストを参照すること

¹⁰ *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité, op. cit.*, p. 266.

¹¹ Emmanuel Levinas, « Le temps et l'autre », Jean Wahl, *Le choix, Le monde, L'existence*, Grenoble-Paris, Arthaud, 1947, p. 186.

は無益ではない。レヴィナスは現代哲学が主張している主体概念に着目し、そこには認識の優位があると主張する。こうした議論のなかで自由という語を使っている。「人間は自由である、つまり権力である¹²」。レヴィナスは権力を自由、つまり自由な状態として考えている。それゆえ、先に示した「時間と他なるもの」からの引用文¹³のなかでレヴィナスが権力を自由として見なしていることはほぼ確実と言って良いだろう。

さて、この権力とは何か。「時間と他なるもの」の「エロス」という節のなかで、レヴィナスは権力を認識する運動という概念に結び付けている。それはエロスと権力との関係が論点になる時に述べられている。「所有すること、認識すること、把持すること、これらは権力の類義語である¹⁴」。それゆえ、レヴィナスにとって権力は認識する運動をも意味している。すでに見たように、認識する運動は『実存から実存者へ』のなかで現れていた。この運動は光に照らされた外部を自我のものに変化させる運動だと考えられた。そうだとすると、権力は光に照らされた外部を自我のものに変化させる認識の運動だと言えるだろう。というのも、権力は認識する運動をも意味していたからである。

先に見たように、「時間と他なるもの」からの引用文¹⁵のなかで、レヴィナスは権力を自由と見なしていると推定された。そして、この権力は光に照らされた外部を自我のものに変化させる認識の運動だと考えられた。これらがそうだとすると、レヴィナスはこの認識する運動を自由だと考えていると言える。

¹² Emmanuel Levinas, « Parole et Silence », dans *Œuvre 2: Œuvres complètes, Tome 2, Parole et Silence et autres conférences inédites au Collège philosophique*, Paris, Grasset/IMEC, 2011, p. 79.

¹³ 「時間と他なるもの」の186ページからの引用文。

¹⁴ Emmanuel Levinas, « Le temps et l'autre », *art. cit.*, p. 190.

¹⁵ 「時間と他なるもの」の186ページからの引用文。

さて、この自由は『全体性と無限』で現れていた認識する自由と類似しているように思われる。この著作において、レヴィナスは他なるものを自我の同一性に還元する認識の運動を自由だと考えていた。そして、「時間と他なるもの」において、光に照らされた外部を自我のものに変化させる認識する運動を自由として見なしていた。これらを比べてみると、後者の自由概念は前者のそれに類似していると言えるだろう——とすると、レヴィナスのテキストの執筆年度順から見て、『全体性と無限』で示されていた自由概念の兆しが「時間と他なるもの」でのそのうちにあるとおそらく言える。

『全体性と無限』において、レヴィナスは他なるものを自我の同一性に還元する認識の運動を自由として、つまり自由な状態にあるものとして考えている。そして、「時間と他なるもの」において、光に照らされた外部を自我のものに変化させる認識する運動を自由だと見なしている。これらのことを踏まえると、レヴィナスは認識する運動を自由、つまり自由な状態にあるものだと見なしていると言える。次に、この意味での自由とは異なると思われる自由概念を確認しよう。

II. もう一つの自由概念

II. 1. 外部からの自由

『実存から実存者へ』の「実体としての『自我』と認識すること」という部の冒頭で、レヴィナスは自我の同一性に注目している。「世界のなかでの私たちの生を構成している意識の流れのなかで、自我は生成の可変的な多様性を通じて同一的なものとして維持されている¹⁶」。自我の同一性は意識の流れ、つまり認識する運動のなかで維持されている。このように自我の同一性が問題となっている文脈のなかでレヴィナスは自由という語を使っている。「認識することは到来するあらゆるものに対する主体の自由の秘

¹⁶ Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant*, op. cit., p. 148.

密 [secret] である。主体の自由がその同一性を保証している¹⁷。認識する運動は自我が「到来するあらゆるもの」から、つまり外部から自由であること、換言すれば自由な状態にあることを構成している隠れた要素である。このことから明らかなように、レヴィナスは外部からの自我の自由を主張している。

II. 2. 存在からの自由

次に、レヴィナスが存在からの自我の自由に言及していることを確認しよう。『実存から実存者へ』の「イポスターズと自由」という部のなかで、レヴィナスは自由を問題にしている。まずレヴィナスは自由が無化ではないと述べている。サルトルが『存在と無』のなかで自由を無化として考えていたことを考慮に入れるのであれば、おそらくこのレヴィナスの記述はサルトルの自由を念頭に置いているのかもしれないが、この点は措いておこう。次にレヴィナスは自我と存在との関係を考察し、以下の文章を書いている。「自我は自らの対象から、そして自己 [soi] から身を引く。しかし、自己に対するこの自由化 [libération] は無限の務めとして現れる¹⁸」。レヴィナスは自我が自己から自由になることに注目している。ここでの自己は存在を指し示しているように思われる。実際、このレヴィナスの文章の直後に、「[...] 自我は存在に永久に繋ぎ止められている」とあり、そしてその直前には「[...] 自我は自らの自己に繋ぎ止められている」とある。この二つの文章を比べてみると、レヴィナスが自己という語を存在の意味で使っていると言える。このことを考慮に入れて先の引用文をもう一度読んでみると、そこで問題になっていることは、自我が自己から、つまり存在から自由になることであると言える。

さて、次に「時間と他なるもの」の「多産性 [La fécondité]」という節のなかで現れる自由注目しよう。まず、文脈から確認しよう。このテクス

¹⁷ *Ibid.*, p. 149.

¹⁸ *Ibid.*, p. 143. 強調はレヴィナス。

トの「エロス」という節のなかで、レヴィナスは自我が他人とエロスの関係を結び、この関係から子が生まれることを問題にする。そして、「多産性」という節のなかで子を産んだ自我とこの子との関係を考察する。この文脈のなかで、レヴィナスはこう書いている。「自我が自己に回帰することはイポスターズ [hypostase] によって始まるが、この回帰には、それゆえ、許しがない [sans rémission] のではない。それはエロスによって開かれる未来 [avenir] という展望のおかげである¹⁹」。この文章を解釈するためにレヴィナスが使っている特殊な用語と表現、つまり「自己」、「イポスターズ」、「エロスによって開かれる未来という展望」の意味を確認しよう。すでに見たように、『実存から実存者へ』のなかでレヴィナスは自己という語を存在の意味で取っていた。そして、このテキストの「イポスターズの意味」という部のなかで、イポスターズという語を説明している。「[...] イポスターズは匿名なある [il y a] の中断を、私的な領域の、名詞の出現を意味している。あるという奥底から存在者 [existant] が生じる²⁰」。イポスターズは、「ある」から、つまり非人称の存在²¹から存在者が、換言すれば自我が出現していることを意味している²²。エロスによって開かれる未来という展望とは、自我と他人とのエロスの関係から生み出される子を指している²³。これらの用語と表現の意味を念頭に置きつつ、問題のレヴィナスの文章に戻ってみると、それを以下のように解釈することができる。つまり、自我が自己に回帰することはそれが存在から出現することによって始まるが、この回帰

¹⁹ Emmanuel Levinas, « Le temps et l'autre », *art. cit.*, p. 192.

²⁰ Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant*, *op. cit.*, p. 141.

²¹ Cf. Rodolphe Calin et François-David Sebbah, *Le vocabulaire de Levinas*, paris, Ellipses, 2011, p. 53.

²² レヴィナスは存在者を自我と見做している。「[...] 自我である存在者 [...]」(Emmanuel Levinas, *De l'existence à l'existant*, *op. cit.*, p. 141)。

²³ Cf. Jean-Luc Thaysse, *Eros et fécondité chez le jeune Levinas*, Paris, L'Harmattan, 1998, p. 210.

は子によって許される。許すという *rémission* は一時的に中断するという
ことをも意味する。それゆえ、子によってこの回帰が一時的に停止するとも
言えるだろう。いずれにせよ、今解釈したレヴィナスの文章のなかでの論
点の一つは、ほぼ確実に、自我とその存在との関係だろう。そうだと
して、注目したいことは、このレヴィナスの文章の直後である。「それゆえ、原因
というカテゴリーに従ってではなく、父というカテゴリーに従ってこそ自
由が生じ。時間が成就するのだ²⁴」。ここでの父は子を産んだ自我を指して
いる²⁵。そして、このレヴィナスの文章は自我とその存在との関係が問題と
なっている文脈のなかで現れている。それゆえ、この引用文を以下
のように解釈することができる。つまり、子を産むことによって自我は存在から
自由である、換言すれば自由な状態にある。

このようにレヴィナスは存在からの自我の自由を主張している。そして、
先に見たように、外部からの自我の自由に関しても事情は同様であった。
こうした自由概念を認識する運動の自由と同一視することはそれなりに難
しい。というのも、後者の自由概念は認識する運動が自由であること、つ
まり自由な状態にあることを意味しているのであって、自我が外部から、
または存在から自由な状態にあることを指し示してはいないからである。

III. 結論

²⁴ Emmanuel Levinas, « Le temps et l'autre », *art. cit.*, p. 192.

²⁵ Cf. Jean-Luc Thaysse, *Eros et fécondité chez le jeune Levinas*, *op. cit.*, p. 153. レヴィ
ナスは自我が他人とのエロスの関係に入り、この関係から子が生まれること
を問題にするが、この子と子を産んだ自我を *filis / père* という語で表現する。
この用語の選択に関しては以下を参照。Cf. Rodolphe Calin et François-David
Sebbah, *Le vocabulaire de Levinas*, *op. cit.*, pp. 48-49 ; cf. François-David Sebbah,
« Levinas : Father / Son / Mother / Daughter », dans *Studia Phœnomenologica*, VI,
2006, pp. 261-273.

レヴィナスは認識する運動を自由、つまり自由な状態にあるものとして考えている。その上、外部からの、そして存在からの自我の自由を主張している。そればかりか、後者の自由概念は前者のそれとは異なる。

冒頭で述べたように、レヴィナスは意志としての自由概念に注目していた。この意味での自由はレヴィナスの初期作品のなかではっきりと現れてはいないように思われる。とすると、なぜレヴィナスはこの自由を問題にしたのか。本稿での考察結果はこの問いに取り掛かる一つの糸口になるだろう。そうだとすると、この結果は意志としての自由が展開されている『全体性と無限』を一層深く理解することに繋がるだろう。